

自序

おなかの解剖図を正面からみると消化管の占める部分が多いことに気付く。これを反映するかのように下痢、腹痛、血便、便秘など消化管症状を訴え病院に訪れる人は多い。これらの症状に対し、血液や尿検査、腹部X線写真なみに消化管を画像で診る方法がエコー検査であることは知られていても、即戦力として活用している施設は意外に多くはない現状にある。幸い、筆者らは浜松南病院 消化器病・IBDセンター長 花井洋行 先生のお膝元で仕事をする機会を得、消化管におけるエコー検査の有用性を経験させてもらっている。この事実を検査に携わる者として世に発信することが消化管病変の診断・治療の手掛かりとして有用な情報提供になると確信し、『ここまで診る消化管エコー』を上梓するきっかけとなった。

本書は各消化管の基礎にはじまり、正常X線像と内視鏡像を対比したことで、消化管エコーへの関心を幅広く理解できるようにしてある。検査手順は筆者らがひごろ実践している「腹部臓器」の"の"字2回走査の延長線上に消化管の系統的走査法を無理なく配慮し、正常エコー像には模式図を付し見開きとした。病変を知る手掛かりとして、筆者らが過去・現在におい経験した多くの症例を集約、疾患のチェックポイントとして模式図で解説。裏付けとして多くのエコー像を提示し、内視鏡、X線検査、CTなどの画像を添え見開きで開陳したことで消化管エコーの醍醐味をご理解いただけるような内容とした。貴重症例のいくつかは従来、拙著で用いたものを引用したことをお断りしておく。

筆者はこれまで多くの消化管エコー検査に関わりを持たせてもらった。この経験を消化管エコーに興味をお持ちの先生や、さらにstep upを目指しておられる先生への参考に供することができれば望外なよろこびである。

上梓に当たり、浜松南病院 渡邊文利院長、副院長の飯田貴之、阿部仁郎 両先生、浜松南病院 消化器病・IBD副センター長 池谷賢太郎先生はじめ、診療部、放射線科、臨床検査科の先生方には何かとご指導、ご協力をいただきました。また、藤枝市立総合病院 消化器科部長 丸山保彦先生にはご教示やら励ましをいただくことができ、上梓に何とかこぎつける源になったことを衷心より厚くお礼申し上げます。

消化管エコーについて「わかりやすく、きれいな画像で、多くの症例」を念頭に心掛け作成しましたが、執筆協力者のあふれんばかりの情熱あってこそ完成に至ることができたものであり、皆様に深く感謝いたします。

なお、間違いの記述など至らない箇所が見受けられた際には、今後のためにも是非、忌憚のないご意見、ご叱正を賜ることができれば幸いです。

末筆ながら、多大なるご指導と温かなお言葉を賜りました浜松南病院 花井洋行先生に心からお礼を申し上げます。

2013年（平成25年）盛夏
杉山 高